

(2023年10月8日配信)

NHK ラジオ深夜便「明日へのことば」10月15日(日)4時台

出演 片岡 浩史 東京女子医大・腎臓内科医**「腎臓病と闘う」**

聞き手 坂口憲一郎

片岡浩史さんは、大学卒業後、JR西日本に入社。改札業務や車掌業務を3年間経験した後、苦労の末、思い立って医学の道に進むという珍しい経歴のお医者さん。

専門分野は、腎臓内科。胃が痛いとか心臓が苦しいなど、ほかの臓器と違い、沈黙の臓器ともいわれる腎臓は、病気が進行しても自覚症状が無く、人工透析や腎臓移植という治療があるが、結局、命を落とす病気。患者総数は、国民全体の8人に1人、ざっと1500万人と言われる。

腎臓は、食物を口にする時、食物から毒素を濾しとり、尿として体外に出す役目をしている。人それぞれ命に限りがあるように、腎臓にも寿命があるという。いかに長く腎臓を大事にして維持していくか。一人一人の自制心と関わるようだ。その腎臓病は、肥満と関係があるという。腎臓病について多くの方々に知っていただきたいという腎臓専門医のお話です。

「ハソウを通じて「平安の心」をあなたに贈ります！」

笛壺 ハソウを愛する会 会長 坂口 憲一郎 (宗憲)

(2018年1月記)

ハソウは、5世紀中頃、新羅から伝えられた須恵器の技法で作陶された焼き物です。古墳から出土するハソウは、しばしば博物館で見ることが出来ます。上部がラップ状で下部が丸く、そこに小さな穴が開いています。何のための穴なのでしょう。学者の間でもいろいろ論争がありました。今では、「酒器」ということになっていますが、この穴に息を吹き込むと不思議な音が出ることから「笛壺」と呼ばれることもあります。

ハソウは、大きさによって音程が違い、一緒に吹くと共鳴して、聞いている人たちの心にも共鳴して、安らかな気持ち広がります。それが人々の心に響くのです。25年前、備前焼の作家好本宗峯は、備前市佐山の山麓に窯を開き、須恵器の技法に取り組み、古代のハソウの復元に成功しました。現在、宗峯さんの「平安」の心と須恵器の技術を、息子の好本敦郎が受け継いでいます。

平安時代には、奈良の不退寺で、歌人在原業平の霊を慰めるためにハソウが吹かれたとされています。20年ほど前にはそれにならって、業平忌に、ハソウによる供養が行われました。法要に参加した私は、ハソウを陶器としてだけでなく、楽器として吹いて現代によみがえらせなければならないと決意しました。

